

ISSN 1882-0468

ISSN-L 1882-0468

NDL 書誌情報ニュースレター

2017年3号(通号42号)

目次

米国議会図書館における BIBFRAME の動向(出張報告) (収集・書誌調整課 柴田洋子)	1
平成 29 年度全国書誌データ・レファレンス協同データベース活用研修会を開催しました (収集・書誌調整課)	6
コラム:書誌データ利活用(12)―利活用事例の紹介(高知県教育委員会と県立高校、 道灌山学園図書室) (国内資料課 吉村風)	11
お知らせ:「日本十進分類法(NDC)新訂 10 版分類基準」を改訂しました (収集・書誌調整課 書誌調整係)	15
お知らせ:2018 年 1 月から書誌情報のダウンロードサービスが新しくなります (収集・書誌調整課)	16
掲載情報紹介	17

米国議会図書館における BIBFRAME の動向(出張報告)

【はじめに】

本誌 2016 年 2 号では、ウェブ環境に適した新しい書誌フレームワークである BIBFRAME の最新動向や、米国議会図書館 (LC) によるデータ試行プロジェクトについてご紹介しました。筆者は、2017 年 3 月に LC を訪問し、BIBFRAME に関する取組みについて、プロジェクトの担当者とデータの試作に参加した目録作業担当者からそれぞれお話を伺うことができました。本稿では、2016 年 4 月以降の LC における BIBFRAME のおもな動向 (2017 年 7 月末現在) について、実際に伺った話とあわせてご紹介します。また、他機関の取組み状況もお知らせします。

【MARC 21 から BIBFRAME 2.0 への変換】

2017 年 3 月に、BIBFRAME 2.0 の語彙が更新されました[1]。あわせて、LC における MARC 21 から BIBFRAME 2.0 への変換仕様も公開されました[2]。MARC 21 のフィールドやサブフィールドについて、それぞれ対応する BIBFRAME 2.0 の語彙とそれが属するクラス (「著作 (Work)」「インスタンス (Instance)」「アイテム (Item)」) が定められています。この変換仕様は、LC の試行プロジェクトで使用するため、適切な変換先がなかったものについては、BIBFRAME 2.0 の拡張語彙として、LC 独自の語彙が作成されました[3]。今後も、試行プロジェクトを進めていく中で、随時更新される予定です。

また、MARC 21 から BIBFRAME 2.0 への変換ツールも公開されました[4]。このツールは、LC の書誌データを対象にしたものです。LC の書誌 ID またはコントロール番号 (LCCN) を指定すると、MARC 形式の書誌データと、BIBFRAME 2.0 に変換された書誌データが並んで表示され、比較できます。

【LC のデータ試行プロジェクト】

1. 第 1 期 (2015 年 10 月～2016 年 3 月)

第 1 期では、BIBFRAME 1.0 に基づく既存データの変換や新規データの作成が行われ、2016 年 6 月に総括報告書が公開されました[5]。BIBFRAME の有効性を検証するという目的が達成されたこと、データの試作に参加した目録作業担当者達からのフィードバックにより、BIBFRAME の開発が非常に進んだこと等が報告されています。

LC を訪問した際、データの試作に参加した日本語資料の担当者から、次のようなお話を伺いました。

(1) 漢字表記のタイトルや責任表示の入力について

LC では、現在の MARC 21 による日本語資料の目録作成において、タイトルや責任表示 (MARC 21 のタグ「245」) には、ローマ字で表記したものを入力しています。その資料にもともと表示されている、漢字等の表記によるタイトルや責任表示の入力には、他の字形により表現されたものを記録する項目 (タグ「880」) を使用しています。

たとえば、村上春樹著『職業としての小説家』の場合、タイトルと責任表示がそれぞれ図 1 のように記録されます。

↓ローマ字表記のタイトルと責任表示

245	10	6 880-02 a Shokugyō to shite no shōsetsuka / c Murakami Haruki.
880	10	6 245-02/\$1 a 職業としての小説家 / c 村上春樹.

↑オリジナルの表記（漢字等）のタイトルと責任表示

図 1 異なる表記のタイトル等の入力データ例 (LC の場合)

一方、BIBFRAME のデータの試作に用いられた、ツールの入力画面には、前述のタグ「880」に相当する情報を記録する項目がなく、漢字等で表記されているオリジナルのタイトル等を入力することができなかったそうです。この入力ツールは LC が独自に開発したもので、非ラテン文字の表記が使用される日本語資料等の目録作成の際の課題として、プロジェクトの担当者とも共有されました。

(2) 試作の感想

全体として、入力ツールを使用してデータを作成する限りでは、BIBFRAME という新しいフレームワークを適用することについてそれほど抵抗感はなかったようです。入力ツールの画面に表示される項目名は、BIBFRAME の語彙ではなく、すでに適用している RDA のエレメントの名称が使われていました。そのため、BIBFRAME のデータモデルや語彙を強く意識することなくデータを作成できたそうです。強いていえば、MARC 21 では一つの項目に入力している内容を、BIBFRAME では複数の項目に入力する必要があり、作業としてはやや煩雑だったそうです。

2. 第 2 期 (2017 年 6 月～)

2017 年 6 月に、第 1 期に参加した 40 名を対象に研修が行われました。7 月には、新規参加者 27 名を対象に行われ、8 月までに、BIBFRAME 2.0 による目録作成が開始される予定です[6][7]。

第 2 期では、より現実的な目録作成環境の構築が目標とされています。以下について、MARC 21 と BIBFRAME 2.0 のそれぞれの形式によるデータの試作が行われる予定です。

- ・ BIBFRAME 2.0 の語彙を用いた書誌データ
- ・ オリジナルの言語表記（非ラテン文字）による書誌データ
- ・ [MODS \(Metadata Object Description Schema\)](#) [8] の語彙を用いた名称典拠データ（目録規則は RDA を適用）

さまざまな機関において BIBFRAME 2.0 に関する実証試験を行ってもらえるように、LC が開発した BIBFRAME 2.0 に関するツール類はすべて公開される予定です。

筆者が訪問した 3 月下旬は、入力ツールの開発等、ちょうど第 2 期の準備が進められているところでした。その進捗状況について、プロジェクトの担当者からお話を伺うこともできました。前述のオリジナルの言語表記の入力に関しては、第 1 期の結果をふまえ、漢字表記のタイトル等も記録できる項目をツールに追加することが、この面会直前に行われていた会議で決まったばかりとのことでした。BIBFRAME の完成時期については、依然とし

て未定なのですが、プロジェクトが日々進んでいることを実感しました。

【他機関の取組み状況】

LCでは、[BIBFRAME 2.0に関する取組みを実施している機関のリスト](#)を公開しています。これによると、ドイツ国立図書館は、2018年に、BIBFRAME 2.0に対応したデータ出力機能（プロトタイプ）をOPACに実装する予定です[9]。また、ハンガリー国立博物館の図書館は、すべての目録データをBIBFRAME形式にLinked Open Data化し、データセットとして公開しました[10]。システムベンダーのEx Libris社は、図書館業務管理システム“Alma”におけるBIBFRAMEの実装機能を、2017年夏頃から段階的にリリースする予定です[11]。そのほか、スタンフォード大学やコロンビア大学等の6機関による連携プロジェクト[LD4P \(Linked Data for Production\)](#)では、従来の目録作成作業からLinked Dataの作成・提供作業をベースとした業務フローへの移行に関する検討に着手しました。このプロジェクトにはLCも参加しており、特定の分野や形態の資料に対応するために、BIBFRAMEの語彙等を検討することがテーマの一つになっています。

また、BIBFRAME関連のメーリングリストによると、スウェーデン国立図書館[12]やフィンランド国立図書館[13]等も取組みを進めているようです。以前よりも具体的な事例が見られるようになり、各機関におけるBIBFRAMEへの関心の高さがうかがわれます。

今回、実際にLCでBIBFRAMEに関わる方々とお会いすることで、まだ具体的な完成時期が定まっていなくとも、取組み自体は着実に進んでいることがわかりました。今後もLCにおけるBIBFRAMEの取組みの進展を期待したいと思います。

柴田 洋子

(しばた ようこ 収集・書誌調整課)

[1] 最新の語彙は、以下をご覧ください。

BIBFRAME 2.0 Vocabulary List View.

<http://id.loc.gov/ontologies/bibframe.html>, (参照 2017-08-16).

[2] 仕様の詳細は、以下をご覧ください。

MARC 21 to BIBFRAME 2.0 Conversion Specifications.

<http://www.loc.gov/bibframe/mtbf/>, (参照 2017-08-16).

[3] 語彙の詳細は、以下をご覧ください。これらは、試行プロジェクトの中で暫定的に使用され、BIBFRAMEの語彙として定義されるかは未定です。

LC BIBFRAME 2.0 Vocabulary Extension List View.

<http://id.loc.gov/ontologies/bflc.html>, (参照 2017-08-16).

[4] ツールは、以下のURLで公開されており、任意のLCのデータを変換できます。

BIBFRAME Comparison Tool.

<http://id.loc.gov/tools/bibframe/compare-id/full-ttl>, (参照 2017-08-16).

変換プログラムも公開されています。

Conversion Programs.

<https://github.com/lcnetdev/marc2bibframe2>, (参照 2017-08-16).

[5] 報告書は、以下をご覧ください。

Library of Congress. “BIBFRAME Pilot (Phase 1): Report and Assessment” .

<http://www.loc.gov/bibframe/docs/pdf/bibframe-pilot-phase1-analysis.pdf>, (参照 2017-08-16).

なお、資料により第1期の開始時期が異なりますが、ここでは、より多くの発表資料等に見られ、上記報告書の本文にも記載されている2015年10月としました。

[6] Beacher Wiggins, Sally McCallum. “Library of Congress Pilot Two: more complete, more participants, more interactive” . BIBFRAME Update Forum at ALA Annual Conference 2017.

<http://www.loc.gov/bibframe/news/source/ala2017-june-bfupdate.pptx>, (参照 2017-08-16).

[7] Dave Reser. “Library of Congress Report” . Committee on Cataloging: Description & Access 2017 Annual Conference.

<http://alets.ala.org/ccdablog/wp-content/uploads/2017/06/LC-2017-06.pdf>, (参照 2017-08-16).

[8] LCが維持管理するメタデータスキーマの一つ。

[9] 現在は、BIBFRAME 1.0形式のデータ出力機能(プロトタイプ)が実装されています。

[10] データセットの詳細は、以下をご覧ください。

data-hnm-hu - Hungarian National Museum Datasets.

<https://datahub.io/dataset/data-hnm-hu>, (参照 2017-08-16).

SPARQLのエンドポイントも公開されています。

<http://data.hnm.hu/sparql>, (参照 2017-08-16).

例) タイトル “The Holy Crown of Hungary : kings and coronations” の書誌データ
BIBFRAME形式のデータ

<http://data.hnm.hu/doc/colls/lib/bib/Instance/MNMKVT19563>, (参照 2017-08-16).

MARC形式のデータ (OPACの表示形式の一つとして選択可能)

<http://data.hnm.hu/doc/colls/lib/bib/Instance/MNMKVT19563.opac>, (参照 2017-08-16).

[11] 詳細は、以下のプレスリリースをご覧ください。

Ex Libris. “Ex Libris Increases Library Connectivity with Implementation of BIBFRAME Roadmap” .

http://www.exlibrisgroup.com/default.asp?catid={916AFF5B-CA4A-48FD-AD54-9AD2ADADEB88}&details_type=1&itemid={2570AFE8-6796-4855-9397-CF1C3D56635D}, (参照 2017-08-16).

[12] スウェーデン国立図書館では、Linked Dataベースのシステム “Libris XL” のフォーマットにBIBFRAME 2.0を採用する方針が決定されました。現在、Linked Data提供サービス “id.kb.se” を開発中です。

National Library of Sweden. “BIBFRAME in Libris XL” .

<https://librisbloggen.kb.se/2017/04/11/bibframe-in-libris-xl/>, (参照 2017-08-16).

データモデル等の詳細は、以下のページをご覧ください。

“Data Model” .

<https://id.kb.se/doc/model>, (参照 2017-08-16).

“MARCFrame” (MARCからのマッピング仕様).

<https://id.kb.se/marcframe/>, (参照 2017-08-16).

[13] フィンランド国立図書館では、全国書誌データ “Fennica” をLinked Data化し、公開しています。著作とインスタンスの区別について、BIBFRAME 2.0のデータモデルに準拠しているそうです。

“Fennica Linked Data” .

<http://linkeddata-kk.lib.helsinki.fi/>, (参照 2017-08-16).

以下のスライドも参考になります。

Osma Suominen. “From MARC silos to Linked Data silos? Data models for bibliographic Linked Data” .

http://dublincore.org/resources/training/ASIST_Webinar_20170228/Suominen-Linked_Data_silos.pdf, (参照 2017-08-16).

平成29年度全国書誌データ・レファレンス協同データベース

利活用研修会を開催しました

【はじめに】

公共図書館や学校図書館などの職員をおもな対象として、[全国書誌データ](#)と[レファレンス協同データベース](#)事業を紹介する研修会（以下、研修会といいます。）を、7月28日（金）に国立国会図書館（NDL）の東京本館で、8月18日（金）に関西館で開催しました。

研修会は、第1部「全国書誌データ」、第2部「レファレンス協同データベース」の講義の後、第3部「実習」という3部構成で行いました。

第1部および第2部では、NDLが提供している全国書誌データやレファレンス協同データベースの概要や利用方法を紹介し、参加者には、全国書誌データを利用した文献リストの作成や、レファレンス協同データベースへのデータ登録を体験していただきました。

第3部の実習では、レファレンスの演習問題に取り組んでいただきました。その過程で、全国書誌データを利用してブックリストを作成し、レファレンス協同データベースに登録する作業を行っていただきました。

研修会終了後には、参加者同士の情報交換の場として、交流会を設けました。

以下に、研修会の概要を報告します。

【研修会の概要】

1. 第1部 講義：全国書誌データの特徴・利用方法と利活用事例紹介（60分）



「全国書誌データの特徴・利用方法と利活用事例紹介」の講義（東京本館会場）

NDLが提供する全国書誌データの概要と、おもな特長、入手方法や利用方法を説明しました。詳しくは[研修資料](#)をご覧ください[1]。

この講義の中で、文献リスト作成の仕方を講師が説明・実演し、参加者にも一緒に行っていただきました。NDL サーチの API を活用したツール[2]を使って文献リストを作成する方法は、一昨年、昨年の研修会でも参加者に体験していただきましたが、今回は、それに加えて、NDL-OPAC からダウンロードしたテキストファイルを加工し、Excel に取り込んで、文献リストを作成する方法も体験していただきました。

手順は次のとおりです。まず、[NDL-OPAC](#) から書誌データを記号区切り形式でダウンロードします[3]。そのままではうまく Excel に取り込むことができないので、正規表現を扱えるテキストエディタ（Mery など）で加工します。加工したデータを、Excel のデータ取込み機能を使って取り込めば、文献リストが完成します[4]。

参加者は、普段はあまり使わない操作にとまどわれつつも、熱心に取り組んでくださいました。

2. 第2部 講義：レファレンス協同データベースの概要・利用方法と利活用事例紹介（90分）



「レファレンス協同データベースの概要・利用方法と利活用事例紹介」の講義（関西館会場）

はじめに、レファレンス協同データベース事業の概要として、事業の目的、参加館数や内訳、登録データ件数などをご紹介しました。参加館数は753館、データの登録件数は19万件を超え、毎年約2万件増加しています（2017年7月末現在）。

つぎに、レファレンス協同データベース事業に参加する意義を説明しました。レファレンスをデータベースに記録することで、レファレンスのスキルや役立つ情報が共有され、レファレンスの効率や対応スピードが向上することが期待できます。また他館が作成した参加館公開のデータを閲覧できること、システムの管理をNDLに任せられることなどの利点があります。

そして、レファレンス協同データベースの基本的な使い方を紹介しました。レファレンス協同データベースには、さまざまな検索方法や登録方法が用意されており、登録した個別のデータについて公開範囲も設定できます。また、データ登録の支援機能として、参考資料の自動入力機能や、関連ファイルの登録機能を備えています。

統計機能の利用や、自館の登録したレファレンス事例をまとめて紹介する方法で実績をアピールし、図書館活動のPRに役立てることもできます。

最後に、参加者に、レファレンス事例の登録を行う演習問題を解いていただきました。演習問題と解答例は、

[レファレンス協同データベース講義資料の別紙1、別紙2](#)をご覧ください。



レファレンス協同データベース
イメージキャラクター「れはっち」

3. 第3部 実習・質疑応答 (50分)

全国書誌データを利用してブックリストを作成し、レファレンス回答や調べ方マニュアルとともに、レファレンス協同データベースに登録する、という流れの実習に、参加者に取り組んでいただきました。実習では以下の必須問題1問、選択問題2問を用意しました。各問題の解き方のヒントや解答例は、[実習資料](#)をご覧ください。

《必須》問題1

次のレファレンス質問に対して、調査して回答を作成し、レファレンス協同データベースのレファレンス事例に登録してください。

詩人 中江俊夫の「だれの巢 だれの卵」という作品を読みたい。

《選択》問題2

次のテーマのブックリストを、全国書誌データを利用して作成し、レファレンス協同データベースの調べ方マニュアルに登録してください。

めずらしい植物をしらべようー虫を食べる草花ー

《選択》問題3

次のコレクションの図書目録を作成し、レファレンス協同データベースの特別コレクションに登録してください。

地元の歌人 永田町蔵が亡くなり、遺族から図書や文書を寄贈された。文書の整理は時間がかかるが、図書は一般的なものが多いので、まずは図書だけでもリストを作って紹介したい。



実習の様子 (東京本館会場)

おもな質疑応答をご紹介します。

質問： 2018年1月にシステムリニューアルが予定されているとのことだが、「NDL 書誌データ取得シート」、「NDL 書誌データ検索シート」の使用方法も変わるのか。

回答： 変更があるのは、NDL-OPAC です[5]。NDL サーチからデータを取得する「NDL 書誌データ取得シート」、「NDL 書誌データ検索シート」については、システムリニューアルによる影響はありません。

質問： レファレンス協同データベースへの参加を検討している。レファレンス事例のアップロードだけではなく、CSV形式などでダウンロードできるのか。

回答： レファレンス協同データベースにアップロードされたデータを CSV 形式などでダウンロードすることが可能です。管理 ID でログインした後、検索結果一覧から全件ダウンロードすることができます。

4. 参加者の声

研修を終えた参加者からは、多くのご意見・ご感想をいただきました。

全国書誌データについては、「自館のシステムリプレイスで全国書誌データの活用が可能となるので、地域資料や CD などの目録作成に全国書誌データを活用したい。」、「NDL-OPAC からの書誌データのダウンロード方法が今までよくわからなかったが、今回実習も含めてやってみることができたのでよかった。今後、文献リスト作成等に使ってみたい。」などのコメントをいただきました。

レファレンス協同データベースについては、「レファレンス協同データベースは、些細なことではないかと迷うような事例でも登録してよいとの話があり、登録への心理的ハードルが下げられた。」といった声をいただきました。

また、熱心に取り組んでいただいた実習についてはもっと時間が欲しいという声や、合同開催によって全国書誌データとレファレンス協同データベースをリンクさせた形で習得することができて良かったといった声もいただきました。

今回いただいた貴重なご意見・ご感想は今後の企画の参考にさせていただきます。

【おわりに】

今年で3年目となる研修会は、東京本館28名、関西館は20名の参加がありました。終了後のアンケートでは、今回も多くの方から「満足」との回答をいただくことができました。

NDLでは、このほか、職員を各地の研修会などに研修講師として派遣する[講師派遣型研修](#)も行っています。ぜひご活用ください。

今後も全国書誌データやレファレンス協同データベースが利活用されるよう、さまざまな取組みを進めていきます。

また、レファレンス協同データベース事業に参加したい図書館からの申込みを随時受け付けております。ご連絡をお待ちしております[6]。

(収集・書誌調整課)

[1] 研修会の資料を以下のページに掲載しています。

http://www.ndl.go.jp/jp/data/data_service/event.html, (参照 2017-08-30).

[2] 今回は、NDL 非常勤調査員でもある同志社大学の原田隆史教授が作成したツール「NDL 書誌データ取得シート」および「NDL 書誌データ検索シート」を使用しました。

本誌 2015 年 3 号 (通号 34 号) のコラムで、使い方をご紹介します。

http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_9496832_po_2015_3.pdf?contentNo=1#page=19, (参照 2017-08-24).

研修会の全国書誌データ講義資料の参考資料もご覧ください。

http://crd.ndl.go.jp/jp/library/documents/h29guidance_data_service.pdf#page=50, (参照 2017-08-28).

また、「NDL 書誌データ取得シート」および「NDL 書誌データ検索シート」はカスタマイズすることもできます。

詳しくは、本誌 2015 年 4 号 (通号 35 号) でご紹介しています。

http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_9579118_po_2015_4.pdf?contentNo=1#page=38, (参照 2017-08-24).

[3] NDL-OPAC からのダウンロードについては、以下をご覧ください。

http://www.ndl.go.jp/jp/data/data_service/jnb/ndl_opac.html, (参照 2017-08-24).

[4] NDL-OPAC からダウンロードしたテキストファイルを加工して、文献リストを作成する方法については、本誌 2014 年 4 号 (通号 31 号) のコラムでもご紹介しています。

http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8833058_po_2014_4.pdf?contentNo=1#page=22, (参照 2017-08-24).

研修会の全国書誌データ講義資料の参考資料もご覧ください。

http://crd.ndl.go.jp/jp/library/documents/h29guidance_data_service.pdf#page=47, (参照 2017-08-28).

[5] 2018 年 1 月から書誌情報のダウンロードサービスが新しくなります。[本誌今号のおしらせ](#)をご覧ください。

[6] レファレンス協同データベース事業への参加については、以下のページをご覧ください。

<http://crd.ndl.go.jp/jp/library/entry.html>, (参照 2017-08-24).

コラム：書誌データ利活用(12)

一利活用事例の紹介(高知県教育委員会と県立高校、道灌山学園図書室)

【はじめに】

国立国会図書館 (NDL) では、NDL の書誌データを利用している図書館を訪問し、利用事例の調査をしています。[本誌 2017 年 2 号 \(通号 41 号\) のコラム](#)に引き続き、今回は、高知県の教育委員会と県立高校 2 校、そして東京都荒川区の学校法人道灌山学園図書室の利用事例についてご紹介します。

【高知県教育委員会・高知県立高知北高等学校・高知県立岡豊^{おこう}高等学校 (2016 年 12 月 1 日～2 日訪問)】

1. 高知県教育委員会

高知県教育委員会では、子どもの読書活動推進の一環として、県立高校の図書館のシステム化を計画し、2012 年から 2014 年までの 3 年間で県立高校 31 校に図書館システムを導入しました。その際、NDL の書誌データが利用できるシステムを採用することにしたそうです。図書館のシステム化は、まず未入力 of 図書館資料をデータベースに登録する遡及入力を行い、遡及入力完了したら、システムによる貸出し・返却を開始するという方針のもと、各校で進めました。また、導入時には教育委員会が、各図書館の担当者を対象に、図書館システムの利用方法に関する研修を行いました。その後も新規配属者および希望者を対象とした研修を毎年行っているそうです。

2. 訪問した県立高校の概要と NDL の書誌データの利用状況

今回の調査では、上述の図書館システムで実際に NDL の書誌データを利用している高知県立高知北高等学校と高知県立岡豊高等学校を訪問しました。

高知県立高知北高等学校は、生徒数約 730 名で、昼間部・夜間部・通信制の三つの課程を設置しています。図書館の担当者は 2 名、蔵書数は約 1 万 1 千冊です。一方、高知県立岡豊高等学校は、生徒数約 890 名で、県内で唯一美術・書道専門のコースがあります。図書館の担当者は 2 名、蔵書数は約 2 万 4 千冊で、美術・書道の専門書や図録を多く揃えている点が特徴です。



高知県立高知北高等学校



高知県立岡豊高等学校

両校とも、新規購入資料と遡及入力対象資料の目録作成に NDL の書誌データを利用しているとのことでした。NDL の書誌データで大多数がカバーされているそうです。

利用手順は次のとおりです。(1)目録作成の対象となる資料を [NDL-OPAC](#) で検索してダウンロードする[1]、(2)ダウンロードしたファイルを自館の図書館システムに取り込む、(3)外国人著者名の読みなど必要な項目を追記・修正する、(4)追記・修正したデータを同システムに適した形に変換してパソコンに保存する、(5)(4)で保存したファイルを再度取り込む。

(1)～(5)の利用手順に手間がかかることが課題とのことでした。

3. まとめ

訪問した2校ではまだ遡及入力の作業中で、貸出しには図書館システムを利用していませんでしたが、教育委員会の話では、図書館システムによる貸出しを開始している図書館からは、システム化のメリットとして、「貸出し作業がかなり簡略化された。」「貸出しカードでは守れなかったプライバシーが図書館システムでは保護できるようになった。」という声があったそうです。

今後、高知県立高校の図書館のシステム化が進む中で、NDL の書誌データも一層活用されることと思います。

【道灌山学園図書室 (2017年3月7日訪問)】

1. 学校法人道灌山学園について

学校法人道灌山学園は、保育福祉専門学校や幼稚園等を運営しています。道灌山学園図書室では、専門学校の学生370名、学園職員70名、専門学校講師40名、幼稚園児230名とその保護者を対象にサービスを行っており、蔵書総数は保育・福祉・介護に関する資料を中心に1万2千冊以上です。



道灌山学園

2. NDLの書誌データの利用状況

道灌山学園図書室では、数年前に図書館システムを導入しました。NDLの書誌データが利用できることが、システムの選定条件の一つだったそうです。

同図書室では、データベースに未入力 of 図書館資料の遡及入力、新規購入資料の目録作成にNDLの書誌データを利用しています。利用手順は次のとおりです。(1) 目録対象資料のISBNで [NDL-OPAC](#) を検索する、(2) [マイリスト](#) の機能を利用して検索結果を保存し、まとめてダウンロードする、(3) 自館の図書館システムに取り込み、絵本、紙芝居、CD-ROM等といった情報を追記する。

目録対象資料をISBNバーコードの有無で振り分け、バーコードのある資料についてはNDLの書誌データを活用し、効率的に作業されていました。

なお、道灌山学園図書室で利用している図書館システムにはExcelで作成したリストの情報を取り込む機能があり、ISBNバーコードがない資料については、Excelにタイトル等の書誌事項を手入力して、システムに取り込んでいるとのことでした。そこで、NDLの書誌データをキーワードで検索してExcelに簡単に取り込めるツール[2]をご紹介したところ、好評でした。

【おわりに】

お忙しい中、調査にご協力いただいた方々に、心から感謝いたします。

このコラムでは、今後もNDLの書誌データの利用事例を調査し、紹介する予定です。NDLの書誌データを業務や各種サービスに活用している事例がありましたら、収集・書誌調整課書誌サービス係<bib-dl@ndl.go.jp>までぜひご連絡ください[3]。

吉村 風

(よしむら かぜ 国内資料課)

[1] NDL-OPACで書誌データを検索してダウンロードする方法については、以下をご覧ください。

NDL-OPACからの書誌データダウンロード利用ガイド (PDF: 350KB).

http://www.ndl.go.jp/jp/data/data_service/jnb/pdf/shoshidataDL_guide.pdf, (参照 2017-07-03).

[2] 本誌 2015 年 3 号 (通号 34 号) の記事でこのツールを紹介しています。

http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_9496832_po_2015_3.pdf?contentNo=1#page=19, (参照 2017-07-03).

[3] 当館の書誌データの取り込み機能を実装している図書館システムについて、以下のページで紹介しています。

http://www.ndl.go.jp/jp/data/data_service/jnb/system_list.html, (参照 2017-08-30).

お知らせ:「日本十進分類法(NDC)新訂10版分類基準」を改訂しました

国立国会図書館(NDL)は、2017年8月、「日本十進分類法(NDC)新訂10版分類基準」を改訂しました。これは、『日本十進分類法』新訂10版(以下、NDC10版といいます。新訂9版についても同様。)を適用するにあたり、NDC10版の項目に対するNDLの解釈や運用方法を定めたものです。

また、NDC9版およびNDC10版の分類基準の対照表も公開しました。

それぞれ以下に掲載しています。あわせてご覧ください。

- 国立国会図書館. 分類・件名(NDLC、NDLSHなど).

http://www.ndl.go.jp/jp/data/catstandards/classification_subject/index.html#ndc

(収集・書誌調整課 書誌調整係)

お知らせ:2018年1月から書誌情報のダウンロードサービスが新しくなります

2018年1月から、書誌情報のダウンロードに特化した「国立国会図書館書誌提供サービス（略称：NDL-Bib）」と、資料の検索・申込サービス「国立国会図書館検索・申込オンラインサービス（略称：国立国会図書館オンライン）」の提供を開始します。

これにより、[国立国会図書館蔵書検索・申込システム \(NDL-OPAC\)](#) は、2017年12月をもってサービスを終了します。

NDL-Bib は、書誌情報を MARC 形式、記号区切り形式など 6 種類の形式でダウンロードできます。また、利用者登録をしていなくても利用できます。詳しくは次のページをご覧ください。

➤ 国立国会図書館書誌提供サービスについて

<http://www.ndl.go.jp/jp/2018renewal/02.html>

(収集・書誌調整課)

掲載情報紹介

2017年6月27日～2017年9月26日に、国立国会図書館ホームページに掲載した書誌情報に関するコンテンツをご紹介します。

- ・[雑誌記事索引採録誌一覧を更新しました。](#)
(掲載日：9月25日)
- ・[「書誌データ利活用研修会ほか」のページを更新しました。](#)
(掲載日：8月29日)
- ・[「日本十進分類法 \(NDC\) 新訂 10 版分類基準 \(2017年8月版\)」を掲載しました。](#)
(掲載日：8月17日)
- ・[「国立国会図書館書誌データ対応システム一覧」を更新しました。](#)
(掲載日：8月7日)
- ・[「当館が作成する書誌データとその修正について」のページを更新しました。](#)
(掲載日：8月7日)
- ・[「当館が作成する書誌データとその修正について」のページを更新しました。](#)
(掲載日：8月1日)
- ・[「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス \(Web NDL Authorities\)」のページを更新しました。](#)
(掲載日：8月1日)
- ・[「国立国会図書館書誌データ対応システム一覧」を更新しました。](#)
(掲載日：7月14日)
- ・[「全国書誌データ提供に関するパンフレット」を更新しました。](#)
(掲載日：7月7日)
- ・[「全国書誌データ提供－関連情報/参考資料」のページを更新しました。](#)
(掲載日：7月7日)
- ・[「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス \(Web NDL Authorities\)」のページを更新しました。](#)
(掲載日：7月7日)
- ・[雑誌記事索引採録誌一覧を更新しました。](#)
(掲載日：7月4日)
- ・[「国立国会図書館件名作業指針 \(2017年7月\)」を掲載しました。](#)
(掲載日：7月3日)

NDL 書誌情報ニュースレター (年4回刊)

2017年3号 (通号 42号) 2017年9月27日発行

編集 国立国会図書館収集書誌部

発行 国立国会図書館

〒100-8924 東京都千代田区永田町 1-10-1

E-mail: bib-news@ndl.go.jp (ニュースレター編集担当)